



Title	＜翻訳＞国境を歩いて越える喜び
Author(s)	ボドル, アーダーム; 築瀬, さやか
Citation	ハンガリー研究. 2025, 3, p. 141-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100418
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国境を歩いて越える喜び

ボドル・アーダーム

歩いて国境を越えよう、そう思い立ったら、豊かとはいえない中央ヨーロッパにおいてはスロヴァキアとポーランドの国境、高タトラ山地とスピシュカー・マグラ山脈の峠を彩るウィサ・ポラナの地ほど美しい場所はない。松林が広がる薄暗い山のなかに光る赤と白の遮断機——通るときには書類とパスポートを提示すればいい。国から国へ、歩いて国境を越える。我々に高揚感を与え、またあるいは誰かを出しぬいたときのような小さな喜びをいだかせてくれる、そんな瞬間だ。

メニハールト博士も、そんなちょっとした喜びを求めてタトランスカー・ヤヴォリナでバスを降り、歩いてウィサ・ポラナへ向かっていたのだった。モルスキェ・オコ方面へ曲がる道まで来ると、検問所の前に車が列をなしているのが見えた。博士はおとなしく最後尾に並んだものの、すぐに後ろからクラクションを鳴らされ、国境警備員にも「何やってるんだ、さっさと来い！」と手招きされた。どちらの国にも属さない緩衝地帯でパスポートと外貨入手に関する証明書¹を見せると、次々とスタンプが押されていく——タトランスカー・ヤヴォリナから出国、ウィサ・ポラナで入国。こうして晴れて車道を覆うコンクリート屋根を抜けることができる。あっという間の国境越えだった。

ポーランドでは雨が降っていた。歩き始めたばかりで最初のカーブにも至っていなかったが、メニハールト博士は松の古木の下で雨宿りをすることにした。検問所からはまだいくらか離れていない。博士は一人雨に打たれ、途方に暮れた。

そんな彼を見かねて松の木の前で止まってくれる車もあったが、博士は手を振り、歩きの旅なのです、この先も歩いて行くつもりなのですとキッパリ断った。しばらくしてモルスキェ・オコの方から一台の馬車がやって来た。ゆっくりとした歩みで、検問所で止められることもなく、

敬礼する将校に見送られて遮断機を抜けていくではないか。察するに、この辺りで顔が利く男なのだろう。やがて馬車は博士がたたずむ松の古木の真横まで来て歩を止めた。ところが御者の男はどこにでもあるような山の農夫で、荷台の幌をめくり、燻製チーズを勧めてきた。メニハールト博士は馬たちに目をやった。小形でたくましい、月毛の山の馬だった。耳の後ろにつけた赤い房飾りも雨で濡れて水が滴っていた。荷台には山ほどの燻製チーズが積まれていて、値段はというと小ぶりなもので60ズウォティ。皮ごと食べられる一品で、むしろその皮こそが美味なのだとか。ネズの木の下で燻されているがゆえの味わい。メニハールト博士は気前よく丸のままチーズを買い、松の木の下で平らげた。

チーズを食べながら博士は不安げに雲行きを見つめた。リスィ山の頂からスピシュカー・マグラ山脈に向かって灰色の雲が動いている。ベスキディ山脈の方から密雲がタトランスカー・ヤヴォリナへと流れてきて、それらが上空でぶつかった。雲から雨が落ちてきた。

午後になるころにはメニハールト博士はずぶ濡れになっていた。しかしこれまでのことを思えば、ましな方だったかもしれない。例えばシュトラルズントでの出来事。たった30分の滞在だったが、スウェーデン王カール12世が過ごした屋敷の向かいの小さなブティックで黒い水兵帽を買い求めた。そのあと博士は、なぜかはわからないが、妙な男たちに海に突き落とされたのだ。だがあのときだって、濡れたものはちゃんと乾いた。

博士は考えた――検問所まで戻ってコンクリート屋根で雨宿りさせてもらおう、あの緩衝地帯で服を乾かし、それから当初の予定通りザコパネに向かえばいいじゃないか。

屋根の下にもぐると書類の提出を求められた。さもありなん、ここは検問所なのだから。スタンプも立ちどころに押されていった。ウィサ・ポラナから出国、タトランスカー・ヤヴォリナで入国。やがて雨が止み、メニハールト博士がザコパネの方へ戻ろうとすると、ご丁寧に国境警備員たちが道案内をしてくれた――方向が逆ですよ。メニハールト博士は目を伏せた。なるほど、仕方がないな。博士はもと来た道をタトランス

カー・ヤヴォリナの方へ向かって歩き出した。

翻訳：築瀬さやか

Bodor, Ádám (2010) A gyalogos határátlépés örömei. *Az utolsó szénégetők*.

本作はルーマニアに住むハンガリー人の文芸紙「我々の道」に 1981 年に投稿され、その後 2010 年に短編集『最後の炭焼き職人』が出版された折に、作者自身が若干の修正を加えたものである。

訳注

1 共産主義時代、外国の通貨をもって旅行する際は、それが旅行のためのものであり、違法に入手したものではない旨の証明書を、入手した銀行に発行してもらわなければならなかった。